

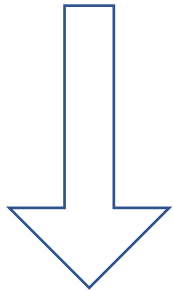
本研究の第1段階（後方視的観察研究）：

川崎病患者の初回治療時の熱型と冠動脈異常発生に関係があるか検証する。

対象

2017年4月～2021年12月

大分こども病院（共同研究機関）の川崎病患者（n=309）



除外

- 10病日以降の治療開始（n=2）
- 36病日に2回目治療施行（n=1）

今回の研究対象（n=306）

方法

初回治療時の熱型により分類した患者群ごとの冠動脈異常発生率を比較した。

発熱持続群：

初回治療終了時まで一度も解熱せず。

早期再発熱群：

初回治療終了時までに一旦解熱したが、終了後36時間後までに再発熱した。

遅発性再発熱群：

初回治療終了時までに一旦解熱したが、終了後36時間～7日後に再発熱した。

解熱群：

初回治療終了時までに解熱し、以降再発熱せず。

結果

	発熱 持続群 (n=40)	早期 再発熱群 (n=37)	遅発性 再発熱群 (n=14)	解熱群 (n=215)	P値
治療前 CRP	10.4 (7.2-16.9)	7.7 (4.5-9.8)	9.7 (3.9-15.3)	6.8 (4.3-10.7)	.0029
冠動脈 異常発生	52.5%	0.0%	14.3%	0.5%	<.0001

初回治療時の熱型により分類した患者 4 群間の比較で、患者属性（年齢、男児の占める割合など）には有意差はなく、血液検査ではCRP、好中球比率、Na、ASTに有意差を認め、冠動脈異常発生率には有意差を認めた。

多変量ロジスティック回帰分析では、初回治療中の発熱持続が冠動脈異常発生の唯一の危険因子となった。